

審査の結果の要旨

氏名 張 佩茹

「一度歌ってみる」の「みる」がそうであるように、「視覚動詞」が動詞本来の実質的な意味を失い、〈見る〉や〈見エル〉という目視動作や視覚感知を表さず、何らかの文法的意味を担って機能するという、いわゆる文法化（grammaticalization）の現象は、世界の多くの言語において観察される。本論文は、“看[見る]、見[見える]、看见[見て見える]”など、中国語の基本的な視覚動詞を取り上げ、それらが文法化の結果として獲得している接続詞的機能と助詞的機能の内実を構文論および機能論の観点から特徴づけ、中国語における視覚動詞の文法化の特質を明らかにしようとするものである。

まず、第1章では考察の範囲と目的を提示する。第2章では、複文に用いられる視覚動詞に二つの接続詞的機能が存在することを指摘し、一つは、後節で叙述される事柄が、前節の主語に立つ人物の心的視点で捉えられた事柄であることを明示する機能であり、一つは、後節で叙述される行為にとっての〈契機〉および〈原因〉となる事柄を導く機能であることを明らかにする。加えて、前者が、主題マーカを欠く中国語にあって、複数の節や文表現を越えて主題の役割を担う人物を明示するための談話機能をも併せ担っていること、また、後者が、書き手の主観性を排した客観的な小説文体の描写文に相応しい接続形式としての機能をも併せ担っていることを的確に論証する。第3章では、「ただ見える」という元来の意味を継承しつつも、すでに動詞性を失っている“只見”について、この形式が、構文的には「〈見る主体〉を背景化し、〈見える対象〉を焦点化」し、談話的には、一連の事態の流れの中に「新たな事態を割り込ま」せ、場面転換を図るための接続形式であることを、従来の先行研究を凌ぐ十分な説得力を以って論証する。第4章では、“比比看”[比べてみる]のように、単音節動詞の重畳形に後接して用いられる“看”を取り上げ、この用法における“看”がすでに動詞ではなく、〈未知の事柄を究明すべく、ある動作を試行する〉という、いわゆる〈試み〉の意味を表す助詞として機能しているという事実を種々の言語事象に基づき論証する。第5章と第6章では、中国語において〈試み〉を表す他の諸形式について考察し、それらとの比較を通して上記の“看”の意味機能をより相対的、より一般的に特徴づける。第7章では議論の全体を整理し、今後の発展的課題を提示する。

文法化のプロセスに関する理論的な考察にやや詰め甘さを残しはするものの、言語コーパスを丹念に読み込み、深い洞察力と明晰かつ堅実な分析力を以って中国語視覚動詞の文法化に関する多数の事実を発掘し、それらの特徴を鮮やかに照らし出した本論文の成果は、中国語学のみならず言語類型論にも大きく貢献するものとして高く評価される。

よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。